風土記の丘の花だより283

今、そしてこれから見られる植物（2025年7月26日）

北海道で38℃39℃などという考えられない猛暑、ここ和歌山より暑いというではありませんか。ホントにどうなっているんでしょうね。そのうち北海道から和歌山に避暑に来るようになるなんて、笑い話では済まされないような気候変動ですね。

地味な花ですがアオツヅラフジの花が咲いています。暑くて、歩くだけでも精一杯なのに、こんな小さな花に目を向ける余裕なんてないかもしれませんね。ほかの木などに巻き付いて成長するつる植物です。なので、しばしば邪魔者扱いされて、そろそろ開花だなと思っていると、刈り取られていることもよくあります。葉はギザギザがなく、少し艶があります。ですから、他のつる植物のヤマノイモや次のヤブガラシなどとはすぐに見分けられます。仲間が少なく、ツヅラフジ科という仲間に分類されています。

これもつる植物のヤブガラシです。他の木々に巻き付いて、覆い被さり、やがてやぶを枯らしてしまうことから「薮枯らし」という名前がつきました。この花には多くの昆虫が集まりますが、殊にアゲハの仲間が目立ちます。この植物は花だけでなく、葉も興味深い形をしています。小さな葉（小葉・しょうよう）が５枚集まった複葉ですが、葉の基部でまず３つに分かれて、その左右が更に２つに分かれます。それで５枚になるのです。

ピンク色のかわいい花が目立ちます。サフランモドキです。「もどき」とは似ているけどちょっと違うという意味の言葉です。ですからこれは「サフランに似ているけど、違う」という意味の名前です。確かにこの花が渡来した頃は、本物のサフランと誤認されていたそうです。でもサフランはアヤメ科で、ヒガンバナ科のサフランモドキとは似ても似つかない花です。似ていると言えば色ぐらいでしょうか。花びらが黄色い、その名もキバナサフランモドキというのもあり、私は先日、町中の植え込みの脇で偶然に見つけました。

旧柳川家住宅の入り口前の溝を挟んだ桜の根元周りにヒメヤブランの花が咲いています。とても小さな草で、よく他の草と共に草刈り機で刈り取られてしまいます。ヤブランはもっと色が濃く、花茎も長くしっかりしていますが、ヒメの方は名前のとおり、小さな花です。風土記では大型のヤブラン、リュウキュウヤブランとも呼ばれるコヤブラン、そしてこのヒメヤブランを見ることができます。先の２つはもう少し涼しくなってから咲くと思います。　　松下